

成果報告書

本研究による渡航は、8月5日から8月28日までを計画していたが、西アフリカ諸国でエボラ出血熱の流行が拡大していることから、アフリカ医療研究会会長の判断により早期帰国することとなり、8月5日から8月19日までアフリカ医療研究会の一員としてコンゴ民主共和国キンボンド地区 ACADEX 小学校生徒を対象とし、身体を知るためのワークショップと栄養ワークショップを行った。ACADEX 小学校の児童は成長や発達、衛生に対する教育を受ける機会が非常に限られ関心が高いとは言えないことから、児童が健康成長発達に興味を持ち自分自身で健康を守る行動をとれるようになることを目的とした健康教育活動を実施した。計画では、①体の衛生状態を守るためのワークショップ、②身体を知るためのワークショップ、③栄養ワークショップの3つの体験型健康教育を予定していたが、渡航期間の短縮により、②③の実施となった。ACADEX 小学校の校舎にポスターを貼り参加者を募って集まった児童 20 人を対象として、身体を知るためのワークショップ、栄養ワークショップの順で連続して実施した。現地の言語はリンガラ語とフランス語であるため、ワークショップを実施する際、現地語への通訳を国立教育養成大学(ISP)で日本語を学んでおりかつ英語も堪能な ISP の学生の協力を得て実施した。

身体を知るためのワークショップは、児童に自身の健康を守るために自身の身体に興味を持ち、体内には内臓があること、それらが様々な機能を持ち、健康、成長、発達に関わっていることを伝える目的で実施した。栄養ワークショップを続けて行うため、子どもたちの関心を高め理解を深めるために、身体の働きと栄養に関連性の高い消化管の機能に特化し説明した。パンを食べると便が出ることを劇で説明後、手作りの人体模型 T シャツを示し、その上で実物のパンを消化器官の働きに合わせた形状に変化させていくことで、消化管にどのようなものがあり、それぞれがどのような働きをしているかの説明を行った。理科の授業が無く人体の構造に関する知識を得る機会が無い児童が、人体の中に内臓があることを実感でき、それら1つ1つの働きを理解しやすいよう視覚的に働きを見えるように、手作り人体模型と子どもたちが楽しめる劇によって実施した。理解できたか尋ねると生徒はうなずいており理解できていると感じられた。子どもたちを小グループに分け、臓器が取れる人体模型 T シャツをグループの代表者に着てもらい、グループごとに臓器を全部取った状態から並べてもらった。各グループにはアフリカ医療研究会メンバーや同時に渡航していた総合政策学部の学生が入り、子どもたちへのサポートをし、理解を確認しながら進めた。このグループワークは、子どもたちが楽しみながら人体に興味を持ってもらうことを目的とした。どのグループも迷うことなく、正しい位置に臓器を取り付けることができていた。次に後日ワークショップを振り返ることができるよう人体の輪郭だけ描いてある紙を配り消化管を描いてもらった。低学年の児童が多く難しい作業かと思われたが、大学生のサポートを受けながらどの子も描くことができおり嬉しそうに画を互いに見せ合っていた。

栄養ワークショップはバランスの良い栄養をとれるようにコンゴ人がよく口にするフフ（現地の主食でキャッサバ粉を練り上げたもの）や野菜などを栄養素で分類できるようになることを目的とした。低学年の児童でありタンパク質などの用語は難しいため、力がみなぎる食材、骨となる食材、筋肉になる食材、病気にならないための食材に分類した。骨や筋肉になる食材という分類の仕方をしたため、骨や筋肉がどのような働きをしているかなど食材の分類に関して理解を促す目的で劇とポスターで説明した。劇により子供の興味が引き付けられ、また何に必要な食材か楽しみながら理解していた。食材を分類する際にクイズを用い、正解と不正解の実物の食材を見せ正解を選んでもらうことをした。実物を使

コンゴ民主共和国キンボンド地区 ACADEX 小学校生徒を対象とした効果的な健康教育
看護医療学部 3年 川村 麻亜紗

用することで子どもの興味を誘い、クイズによって楽しみながら栄養に関して学べることを目的とした。子どもたちは食材の分類クイズに積極的に参加しており、ほとんどの児童が自信を持って正解を即座に選んでいた。学校や家庭でも食材の栄養素などは教えていないということであったが、生活の中で自然と理解しているようであった。

身体を知るためのワークショップ、栄養ワークショップ共に子どもたちにとって初めて習う内容であったため、興味深い内容であったようだ。低学年の児童が多かったが、人体を知るためのワークショップで子どもたちの書いた絵や栄養ワークショップの子どもたちの反応から、子どもの理解度に合わせたワークショップができたと考えられる。ワークショップ終了後次のワークショップを期待する声が聴かれ、子どもたちが自身の身体、健康、成長、発達に興味を持つことができたと感じられた。このことが衛生行動を身に着ける動機となり、子どもたちが自身の健康を守れるようになると考えられ、次年度体の衛生状態を守るためのワークショップを実施したい。通訳を担当した ISP の大学生からは、子どもたちの反応は良く、学校や家庭で習わない内容であるため子どもたちにとって良い学びになったと評価を得ることができた。また、食事を作る母親に対しても同じ内容のワークショップを実施した方が良いというアドバイスがあった。親を対象とする場合、家庭でバランスの良い食事を作るために、食材を栄養素ごとに分類できるようにするだけでなく、それらをどれくらいの比率で食べると栄養バランスが理想的であるか栄養バランス表などを用いることが必要となる。5 大栄養素への食材の分類に加え、栄養バランス表を用いた大人向けの WS を来年度は実施したい。また人体のワークショップにおいて今回は消化管に特化した。子どもたちが人体の中に消化管しかないように捉えてしまう可能性がある。今後継続してワークショップを行い、他の臓器もありさまざまな働きを持っていることを伝えていきたい。今回 ACADEX 小学校の先生方がワークショップの見学に来られた。ISP の学生の説明を子どもたちが理解することが難しかった際、先生方は子どもたちが理解しやすいように言い換えてくださり子どもたちは理解することができるような場面もあった。また、先生とともにワークショップを行うことで、私たちの帰国後も使用した教材を先生方が使用して参加しなかった他の子どもたちに対してもワークショップを行うことができる。来年度以降は私たちが現地にいなくても活動が継続できるよう先生方と積極的に連携をとっていきたい。なぜワークショップが必要なのか、教材の使用方法、ワークショップの内容を事前に先生方と共有し、数回同じワークショップを実施する中で、徐々に先生のみで同じワークショップを実施できるようにしたいと考える。

ワークショップの準備において指導を受けた看護医療学部教員や医学部公衆衛生学教室教員、実施においてご協力いただいた SFC 英語教師サイモン・ベデロ先生、アカデックス小学校の先生、ISP の学生、共に渡航した他チームの学生、皆様に感謝したい。